

佳作

Ti voglio bene (ティヴォリオベネ)

山口県サビエル高等学校三年 細見 幸来

私は、高校二年生の二学期から十か月間、イタリアに留学した。親元を、そして日本を離れるということは、私にとって初めてだった。私の派遣されたバリーという地域は、日本人がほほいしない所だった。だから、少し道を歩くだけで常に多くの視線を浴びた。中国人と間違えられたからだ。何か言ってくる人もいた。睨んでくる人も、私を見て笑ってくる人もいた。私と一緒に歩くと、必ずそのような人たちとすれ違う。私は家の外を歩くのがいつも怖かった。だから、いつも外出には心の準備が必要だった。

留学先の高校に登校中、人種差別を受けた。知らない人が後ろから追いかけてきて、持ち物を掴もうとしたり、私に向けて物を投げたりした。もし、その時後ろを振り返らなかつたら、身の危険があったかもしれないと思うとすごく怖かった。私はただ道を歩いていただけだ。決して、周りの人に迷惑がかかることはしていない。登校後、私の様子が異変を感じた理科の先生が、声をかけて

堂々と歩いてくれた。そんなこと、普通の人なら簡単にできるはずがない。だから、私の友達は強い。その心の強さを尊敬している。

最初のホストファミリーとは、理解し合うまで時間がかかったから、友達がほぼ毎週遊びに行く予定を立ててくれた。毎日のように泣き、ご飯も食べられず、ホームシックで心が壊れてしまいそうなとき、友達と遊ぶ時間が大きな支えだった。友達がいなくなったら、きっと三か月も経たないうちに帰国していただろう。いや、絶対に帰っていた。

帰国前日に、友達がサプライズパーティーを開いてくれた。参加者の中には、習い事で毎日忙しい友達もいたが、私の帰国する一か月以上も前から、

「幸来が帰国する日と前日は絶対に予定を入れられない。

幸来と一緒にいる日って決めているから。」

と言っていた。その話を聞く度に、私は涙をこらえた。そして、サプライズパーティーをするために、時間を割いて人を集めてくれたことを知り、ついに涙がこらえられなくなった。ホストファミリー、クラスみんな、バレーボールクラブでできた友達、友達の家族まで来てくれた。会場で私を待っていてくれた、みんなの顔を見て、涙が止まらなかった。イタリアで辛いことがいっぱいあったな。絶対に、すぐ日本に帰ってやるって思っていたのに。ああ、みんなの顔を見て、こんなに涙が出るのなら、

くださった。不安と怒りと悔しさと泣き出す私にきつくハグをして、学校のカフェでカプチーノを買い、友達を連れてきてくれた。先生は次の授業があったからだ。友達は私の話をゆっくりと聞いてくれた。話が終わると、「何かあったら、不安になったら、すごく怖くなったら、メッセージを送って。電話をして。私はいつもそばにいるから。」

と言ってくれた。この言葉は、私にとって大きな支えとなった。別の日に、同じ人達が偽物の鉄砲で撃ってきても平気になった。

私の帰国日が近づくとつれ、友達たちは口癖のようにこう言った。

「君は強いね。たった一人、飛行機で十六時間もかかるような所で、十か月も生活できるなんて。イタリア語が全く話せなかった状態から、こんなに会話できるまで成長するなんて。自分がもし日本に行っても、君みたいにやっていけないと思う。」

私が強くなれたのは、支えてくれた周りの人達のおかげだ。私を認め、いつも気にかけてくれた先生方や、本当の家族として接してくれるホストファミリーに出会えたからだ。そして、私より何倍も強い友達がいたからだ。道を歩くと必ず偏見の目で見られる。その私の隣にいると、友達もその対象となることもあったはずだ。それでも、みんな私の友達でいてくれた。十か月間ずっと隣を

私はここに来てよかった、楽しかったのだと、そう思えた。

最後には、ホストファミリーが、一緒に観たアニメーション映画『魔女の宅急便』で出てくるケーキを、主人公のKIKIからKOKOという文字に変え、日本とイタリアの国旗を付け加えて用意してくれた。この留学生活が、映画の主人公に似ていて、私が好きだと覚えていてくれたのだ。日本の母の好きな映画で、この作品を見て、娘に主人公のような子に育ってほしいと思ったそうだ。そのことを思い出し、また涙が溢れた。

友達やホストファミリーがよくかけてくれた、大好きな言葉がある。

「ティヴォリオベネ」

あなたのことが大切だという意味だ。この言葉を思い出すと、心が温かくなる。留学先で見た、美しい景色や出会った人の笑顔、大きな感動が、私の原動力だ。もしこの先、すごく辛いことがあったとしても、目を閉じてサプライズパーティーで見たみんなの顔を思い出せば、もっと力が湧いてくるはずだ。